

YMFS
www.ymfs.jp

平成24年度
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
年間事業報告書

YMFS

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

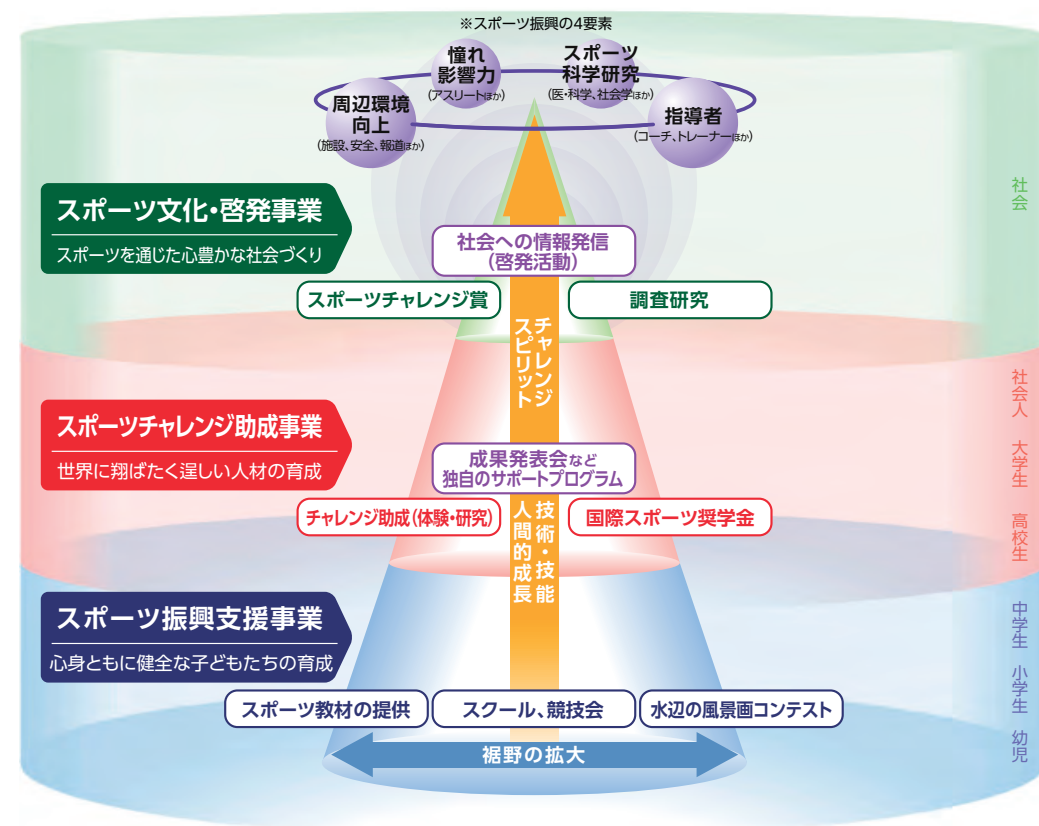
〒438-8501 静岡県磐田市新貝2500
Tel. 0538-32-9827 Fax. 0538-32-1112

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

YMFSの 事業目的

「豊かな人間性涵養」に効果的なスポーツの振興
およびスポーツ文化向上による国家社会への貢献

チャレンジする尊さの訴求(チャレンジスピリットの喚起・醸成)



平成24年度の 事業活動を振り返って



平成24年度のスポーツ界を振り返りますと、まだ記憶に新しい夏のロンドンオリンピックでの金メダル7個を含む38個という史上最多のメダル獲得や、パラリンピックでの団体競技初の金メダルに輝いたゴールボールなど、各種競技での日本人選手の活躍は多くの人々に勇気と感動を与えてくれました。また、その後に開催された東京銀座の凱旋パレードには約50万人が駆けつけ、震災復興を支援するために仙台で開催されたパレードでも、歓喜の中、オリンピックやパラリンピアンが笑顔で沿道の人々と触れ合いました。こうした感動的なムーブメントを振り返るたびに、あらためてスポーツの持つ「力」「価値」を実感します。ぜひこの勢いが2020年東京オリンピック・パラリンピックの招致実現につながってほしいと願っています。

他方、明るい出来事ばかりではありませんでした。スポーツ指導の現場での体罰問題は大変残念な事態であり、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人の権利」というスポーツ基本法の理念の下に、暴力が徹底的に排除され、指導者をはじめスポーツを楽しみ、親しむ全ての人たちにフェアプレー精神を広げていくことの大切さを感じております。

また、3月11日で発生から2年を迎えた東日本大震災の復興への道は続いていますが、施設損壊や住民避難、原発事故による放射能漏れなどの影響でスポーツや学校体育、部活動が困難な状況は現在も各地で残り、少しでもスポーツができる環境を作ろうと献身的な努力や工夫がなされているものの、屋外活動制限等による子どもたちの運動量低下は、長期的になれば懸念されるところです。

こうしたスポーツを取り巻く社会情勢の中で、当財団の平成24年度事業活動は関係各位のご協力を戴きながら、概ね計画通りの事業を運営することができました。「スポーツを通じて夢の実現にチャレンジする人を応援する」スローガンの下、スポーツチャレンジ助成事業では、世界に翔ばたく逞しい人材の育成を目的に、今年度は25名の体験、研究、奨学生に助成金・奨学金を給付すると共に、中間及び成果報告会、異分野交流の機会を設けるなど当財団独自のフォローアップを行ってきました。また、スポーツ振興支援事業ではジュニアヨットスクール葉山のセーリング指導、自然・水辺体験を含めた総合的なカリキュラムの実施、被災地を含む全国の小学校等182校・団体へのスポーツ教材の提供など、心身ともに健全な子どもたちの育成を支援してきました。スポーツ文化・啓発事業では、こうした子どもたちの逞しい活動や、助成対象者が高い目標に向かってチャレンジするその実像を、より広く社会に発信すると共に、長年スポーツ振興に大きく貢献された「縁の下での力持ち」を表彰するスポーツチャレンジ賞、今年度から新たに取り組んだ「障害者スポーツの現状に関する調査研究」でも一定の成果を上げることができました。

設立後7年目を迎える平成25年度は、公益法人制度改革の中、公益という枠組みの中での民間らしさ、「当財団らしさ」を念頭に、「更なる事業の質向上」「新たな価値づくり」を基調とする中期事業方針に沿って、より充実した事業を進めて参ります。今後とも引き続きご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団

理事長 木村 隆昭

平成24年度 ヤマハ発動機スポーツ振興財団 年間事業報告書

平成24年度の事業活動を振り返って	3
I トピックス	4
II 事業別の活動報告	6
1 スポーツチャレンジ助成事業	
2 スポーツ振興支援事業	
3 スポーツ文化・啓発事業	
III 事業推進体制	15

I トピックス

第6回YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングを開催

チャレンジャーが「語り・学び・考えた」3日間

スポーツチャレンジ助成事業の年度を締めくくる恒例行事「第6回 YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」を、3月15～17日の3日間にわたり、静岡県掛川市のヤマハリゾートつま恋で開催しました。この催しは、OB・OGを含む同制度の助成対象者（チャレンジャー）が一堂に会し、活動成果の報告を行うとともに新たなチャレンジに向けた出発点として毎年開催しているものです。本年度も「語り・学び・考える」をコンセプトに、基調講演、スポーツ討論会、特別講演、異分野交流などを通じて相互に良い刺激を与えました。詳しくは P9 をご覧ください。



アスリートや研究者が一年間のチャレンジの経過や成果を報告。活発に意見を交換することで、互いに刺激を与え合った



スポーツ討論会のテーマは「練習とは何か」。北海学園大学の川谷茂樹教授を講師に招き、グループディスカッションを行った



本年度の特別講演は、JAXAの川口淳一郎氏による「はやぶさが挑んだ人類初の往復宇宙飛行、その7年間の歩み」

スポーツチャレンジ助成制度に「継続助成」を新設

より高い目標へのチャレンジを後押し

スポーツを通じて自己の夢・目標に向けてチャレンジするアスリートや指導者、研究者等の活動を助成する「スポーツチャレンジ助成」事業のプログラムを拡充し、より高い目標へのチャレンジを後押しする継続助成を新設しました。詳しくは P7 をご覧ください。

第5回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 表彰式を開催

スポーツ振興の「縁の下」の力持ちの功績を称える

「第5回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」の表彰式を、4月9日、東京會館（東京都千代田区）で開催しました。同表彰式はこれまで「スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」の場で開催してきましたが、チャレンジスピリットあふれる受賞者の実像を通じて「挑戦すること」の尊さや大切さをより広く社会に発信する機会と位置付け、関係者や報道機関など75名の出席の下に開催しました。詳しくは P12 をご覧ください。



4月9日に東京で開催した「第5回スポーツチャレンジ賞 表彰式」

調査研究委員会を発足

「大学における障害者スポーツの現状」について調査報告

平成24年度より、スポーツ文化・啓発事業の新たな取り組みとして、スポーツ振興にかかわる調査研究をスタートしました。初年度である平成24年度は、障害者スポーツ、特にパラリンピック等の世界大会をめざすアスリートの育成・強化環境の現状を把握するために「大学における障害者スポーツの現状」についてアンケート調査を行い、報告書を発行しました。詳しくは P14 をご覧ください。

初年度の調査テーマ「大学における障害者スポーツの現状に関する調査研究」は、報告書にまとめて発行するとともに、当財団ウェブサイトにも掲載している



平成24年度年間事業活動の実績

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業共通	理事会 評議員会	◆5/25 第1回理事会	◆6/15評議員会					◆10/24 第2回理事会				◆2/28 第3回理事会
スポーツチャレンジ 助成事業	24年度助成金交付			中間報告会 7期生募集	◆9/20・22・28(体験) ◆8/30募集リリース	◆10/22(研究・奨学)	◆10/22(研究・奨学)	◆11/2・3・26(体験・研究・奨学)				◆3/15～17 チャレンジャーズ ミーティング
スポーツ振興支援事業	ジュニアヨット スクール葉山	◆5/3～6 国際交流大会	◆7/22 安全講習会 ◆7/31～8/4 夏季合宿	◆8/24～26 外洋帆走			◆10/28 保護者会	◆11/17 体力測定				◆3/22～25 セーリング チャレンジ カップ
	葉山スクール活動(技術向上 & 人間的成長 指導者育成/指導体制強化)											
	スポーツ 教材提供	4/16～6/8 提供先募集	◆6/15抽選	◆7月上旬 教材配布								◆1/31教材活用報告締切
	水辺の風景画 コンテスト			水辺の風景画作品募集 (7/2～10/1)		◆10/18予選会 ◆10/23本選会	◆10/23本選会	◆11/26・28・29、12/3大臣賞表彰式 ◆11/1結果発表				
スポーツ文化・啓発事業	スポーツ チャレンジ賞					スポーツチャレンジ賞公募 (9/22～11/15)			◆12/13・14第1回審査 ◆1/21・22第2回審査			◆3/16 スポーツ 討論会
	調査研究		◆6/15 障害者スポーツ委員会		◆8/20 障害者スポーツ委員会	◆10/11 障害者スポーツ委員会		◆12/6 障害者スポーツ委員会				
	会報誌 発行	◆「Do the Challenge」 Vol.3		◆「Do the Challenge」 Vol.4		◆「Do the Challenge」 Vol.5			◆「Do the Challenge」 Vol.6			
	情報発信力 強化	◆平成23年度年間事業報告書										
	情報発信力強化(Webサイト、リリースなど)											

Ⅱ 事業別の活動報告

1. スポーツチャレンジ助成事業

スポーツチャレンジ助成事業は、スポーツを通じて自己の夢・目標にチャレンジするアスリートや指導者、研究者等の活動を支援する当財団の中核事業です。チャレンジャー自身による目標管理、その進捗・成果を発表する報告会、また分野を超えた交流による刺激や気づきを促進する独自のプログラムにより、競技や研究の成果向上を支援するとともに、社会にとって有用な逞しい人材の育成をめざしています。

（1）平成24年度（第6期生）およびOB・OGチャレンジャーの主な実績

スポーツチャレンジ助成の対象者は、6年間で延べ174名になりました。第1期生～6期生チャレンジャーの平成24年度における主な実績を紹介します。

体験5期生 我孫子 智美選手（陸上・棒高跳び／選手）

■チャレンジテーマ
世界陸上競技選手権大会およびオリンピック大会への出場と入賞をめざして



6月8日～10日に長居陸上競技場にて行われた第96回日本陸上競技選手権大会で、オリンピック標準B記録である4m40（日本新記録）を跳び、3年連続4回目の優勝を果たしました。ロンドンオリンピックでは4m25を1回の跳躍で成功しましたが、自己記録である4m40を跳ぶことができず、目標としていた決勝進出は果たせませんでした。

体験3期生 黒須 成美選手（近代五種／選手）

■チャレンジテーマ
ロンドンオリンピックに向けて



5月19日、ロンドンオリンピック予選を兼ねた近代五種アジア選手権で6位に入賞し、この競技では日本人女子選手として初めてとなるオリンピック出場権を獲得しました。初のオリンピックとなるロンドンでは34位でゴールしました。

体験6期生 山崎 勇喜選手（陸上・競歩／選手）

■チャレンジテーマ
ロンドン・リオ五輪 50km 競歩における入賞及びメダル獲得
4月15日、ロンドンオリンピック代表選手選考競技会を兼ねた第96回日本選手権50km競歩に出場し、3時間41分47秒で2年ぶり8度目の優勝を果たし、3度目のオリンピック出場を決めました。ロンドンでは先頭集団を歩きながらも、ひざ曲りおよび接地不良の反則により失格となりました。

体験6期生 佐藤 圭太選手（陸上・障害者／選手）

■チャレンジテーマ
ロンドンパラリンピック出場及び決勝進出への挑戦



初のパラリンピック出場となった佐藤選手は、200m、400m、4×100mリレーの3種目に出場しました。200mと400mでは予選敗退となりましたが、第2期生の多川知希選手、第5期生の春田純選手とともに出場した4×100mリレーでは日本記録を更新し、4位に入賞しました。

体験4期生 副島 正純選手（車いすマラソン／選手）

■チャレンジテーマ
ロンドンパラリンピックへの挑戦



マラソン人生の集大成として出場したロンドンパラリンピックでは、ゴール直前でメダル争いを展開し、4位に入賞しました。

体験6期生 田井 小百合選手（陸上・障害者／選手）

■チャレンジテーマ
デフリンピック陸上 100m ハードルで金メダルをめざす



7月にカナダで開催された世界ろう者陸上選手権で銀メダルを獲得しました。また、今年7月にブルガリアで開催されるデフリンピックへの出場を決めました。

研究1・3期生 金沢大学 人間科学系運動生理学研究室

■チャレンジテーマ
運動時の筋内酸素ダイナミクスとコンディショニング評価への応用の可能性

研究論文が、Advances in Experimental Medicine and Biology Volume 662, 2010, pp 323-328 他各誌に原著論文として掲載されました。

研究3期生 星川 佳広

■チャレンジテーマ
サッカー選手のスプリント能力の評価基準作成と思春期選手の体幹トレーニングの効果

研究論文が、トレーニング科学第24巻2号ほかに原著論文として掲載されました。

研究2期生 羽倉 信宏

■チャレンジテーマ
道具が身体表象に取り込まれる過程の研究

研究論文が、Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciencesより原著論文として出版されました。

外国人留学生4期生 林 勝龍

■チャレンジテーマ
日本統治下における台湾野球の文化研究

研究論文が、スポーツ人類学研究（2011年12月13日発行）第13号に原著論文として掲載されました。

研究2期生 小西 優

■チャレンジテーマ
前十字韌帯損傷患者の筋力低下のメカニズムについて

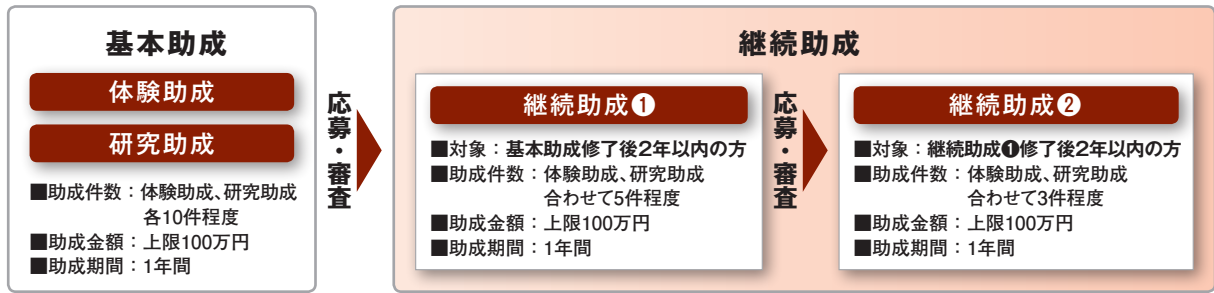
研究論文が、European Society of Sports Traumatology Knee Surgery and Arthroscopy のオフィシャルジャーナルである Knee Surgery, Sports Traumatology, Arthroscopy 他に原著論文として掲載されました。

（2）平成25年度（第7期生）の募集と決定

スポーツチャレンジ助成及び国際スポーツ奨学金の平成25年度（第7期生）の募集を行い、書類選考による1次審査と面接による2次審査を経て、下記のとおり決定しました。7期生の助成金贈呈式は、3月15日、第6回YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングの初日に実施しました。

■継続助成制度を新設

より高い目標へのチャレンジを後押しするため、これまでの助成プログラムを拡充し、基本助成の修了者を対象とした2段階の「継続助成」を新設しました。その初年度にあたる第7期生では、4件（体験3件、研究1件）の継続助成を決定しました。



■応募状況

区 分		募集期間	応募数	採択数	助成金額(計)
体験助成	基本助成	9月1日 ～ 11月15日	44	8	719万円
	継続助成		10	3	215万円
研究助成	基本助成		68	12	1,115万円
	継続助成		5	1	90万円
国際スポーツ奨学金			22	3	360万円(1年分)
合 計			149	27	2,499万円

■応募件数推移（参考）

区 分	1期生	2期生	3期生	4期生	5期生	6期生	7期生
体験助成	74	29	46	46	48	53	54
研究助成	101	65	75	84	90	97	73
国際スポーツ奨学金	16	23	17	20	13	17	22
合 計	191	117	138	150	151	167	149

※第7期生は、研究助成の応募対象者を変更（大学院博士課程在籍者、教授職（相当）を除く日本の研究機関の研究職の方）

■第7期生チャレンジャー一覧

氏名（基本/継続）	チャレンジテーマ	分 野
体験助成	梅野 裕理	チェアスキー技術の向上とレーシング技能の強化～障害者アルペンスキーへの挑戦～
	小林 由貴	スキー（障害者スポーツ）/選手
	佐藤 麻梨乃	クロスカントリースキー-2014年ソチオリンピック出場・活躍のための競技力向上
	田中 幸太郎	スキー（クロスカントリー）/選手
	羽根田 卓也	第22回夏季デフリンピック棒高跳びの部で優勝と世界ろう者新記録
	原田 小夜子	陸上・棒高跳び（障害者スポーツ）/選手
	日置 千那子	アマチュアレスリング競技におけるオリンピック金メダルへの挑戦
	安田 好隆	レスリング/選手
	田井 小百合	カヌー（スラローム）/選手
	竹花 康太郎	カヌー（スラローム）/選手
研究助成	平田 彩寧	夢へのチャレンジ ～2016年リオ五輪セーリング競技日本代表に向けて～
		セーリング/選手
		スキークロス/選手
		ボルトガルでの日本人サッカー指導者としての挑戦～戦術的ピリオダイゼーションの追求～
		サッカー/指導者
		デフリンピック陸上競技100mハードルで金メダル獲得をめざす ～聴覚障がい母の挑戦～
		陸上・100mハードル（障害者スポーツ）/選手
		第22回夏季デフリンピック大会陸上競技・棒高跳びの部で金メダル獲得&世界ろうあ記録更新
		陸上・棒高跳び（障害者スポーツ）/選手・指導者
		女子ラグビーでの五輪・WCP出場に向けての強化活動と女子ラグビーの普及
		ラグビー/選手

氏名（基本/継続）	チャレンジテーマ	所 属
研究助成	阿部 匡樹	共同力発揮課題における個々の貢献度の組織化:運動の最適化?それとも社会性の影響?
	石澤 里枝	運動によるミトコンドリア生合成の亢進に対する中鎖脂肪酸の貢献～分子シグナルとしての新たな機能～
	岩本 えりか	低酸素環境が運動時の血流パターンに与える影響 -新たな運動処方プログラム作成を目指して-
	江川 賢一	住民協働によるスポーツ推進計画に基づく健康なまちづくり-スポーツ実施率増加プロセスに関する実証研究-
	小笠原 理紀	トレーニング効果の停滞に関与する因子とメカニズムの解明
	竹村 嘉晃	ヨーガの健康・社会的機能の解明と大学教育への導入促進-日・印・米の比較を通して
	寺田 新	国立民族学博物館 大学共同利用機関 外来研究員
	長谷川 弓子	エビジェネティクス理論を活用した運動による抗糖尿病効果を増強する方法の開発
	東田 一彦	ゴルフに心理的距離は存在するか
	福原 和伸	持久的パフォーマンス向上を目的とした筋内脂肪の形成・分解の分子機構の解明
	松島 剛史	球技スポーツ選手の予測技能獲得に向けたバーチャルヒトモデルの構築
	若林 斉	グローバル化過程におけるラグビー文化の統治に関する歴史社会学的研究
	瀬戸 邦弘	現代の子どもの生活運動習慣が体温概日リズムおよび発育・発達に及ぼす影響の検討
		千葉工業大学 工学部教育センター 助教
		アジア共通のスポーツ文化である民俗綱引きを通して、地域の共通性を確認し、国際理解・友好を深める
		上智大学 文学部 保健体育研究室 常勤嘱託講師

奨学 金	氏名(期間)	チャレンジテーマ	所 属	
	言上 智洋	2年	いかにしたら速く泳げるか?—動作解析研究から、最速の泳技術を探索する—	イギリス/The University of Edinburgh 大学院博士課程1年
	佐藤 潤一	1年	メガスポーツイベントにおける若年層向けマーケティング戦略の研究 ソーシャルメディアとの連携に着目して	イギリス/London School of Economics and Political Science 大学院修士課程1年
	郭 叶舟	1年	中国における障害者水泳の現状と課題—日本の障害者水泳との比較を通して—	中国/筑波大学大学院 人間総合科学研究科 修士課程1年

※平成25年2月6日現在

(3) チャレンジャーを支援する各種プログラム

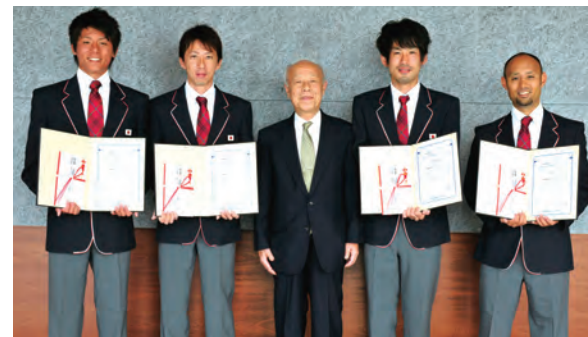
当財団では、助成対象者に対する助成金の交付に加え、年間を通じた各種サポートを行っています。目標と現状のギャップを明確にし、そのギャップを解消するための課題や具体的な取り組みを自ら計画し、四半期ごとの報告書提出と中間報告会での発表、さらに年度末に開催する「YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」では成果発表を行うとともに、分野を超えた交流機会を設けることで相互刺激や研鑽を促進するなどの支援をしています。

■ロンドンオリンピック／パラリンピック激励会

スポーツチャレンジ体験助成の対象者の中からロンドンオリンピックに3名の選手、またロンドンパラリンピックには5名の選手が出場しました。当財団では激励会を開催し、特別チャレンジャー賞（賞金10万円）を贈呈しました。



7月20日に開催したロンドンオリンピック激励会には、写真右から浅見審査委員長、黒須成美選手（近代五種）、我孫子智美選手（棒高跳び）、西田審査委員が出席。競歩の山崎勇喜選手は合宿のため欠席



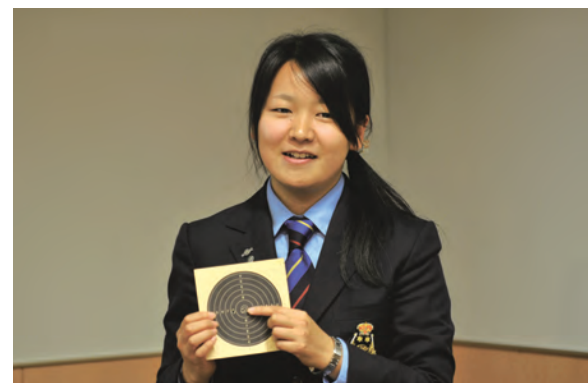
7月23日に開催したロンドンパラリンピック激励会には、写真右から陸上短距離の山本篤選手、多川知希選手、浅見審査委員長、春田純選手、佐藤圭太選手が出席。車いすマラソンの副島正純選手は合宿のため欠席

■中間報告会（計7回）

9月から11月にかけて合計7回の中間報告会（東京、静岡）を開催しました。各チャレンジャーから活動の進捗報告が行われたほか、浅見俊雄審査委員長をはじめとする審査委員から激励やアドバイスが送られました。また報告会後には分野を超えた座談会を実施し、「世界のトップとの差」などのテーマについて活発な意見交換を行いました。



チャレンジ計画の進捗状況を報告し合う中間報告会



エアライフル競技について説明を行う湯浅菜月選手（第6期生）



中間報告を行う外国人留学生のラファエルさん（第6期生）



中間報告会は9～11月の間に合計7回開催

■第6回 YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング

毎年3月に開催する「YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」は、スポーツチャレンジ助成事業の年度を締めくくる恒例行事です。平成24年度は3月15日～17日の3日間にわたり、静岡県掛川市のヤマハリゾートつま恋にて開催しました。

本年度も第6期生やOB・OGチャレンジャーによる成果報告会を中心に、第7期生の贈呈式、第6期生の修了式に加え、「語り・学び・考える3日間」をコンセプトにチャレンジャーのさらなる成長を支援するプログラムとして、基調講演「チャレンジって何だろう」（浅見俊雄氏）、スポーツ討論会「練習とは何か」（川谷茂樹氏）、特別講演「はやぶさが挑んだ人類初の往復宇宙飛行、その7年間の歩み」（川口淳一郎氏）等を実施しました。



合計29人のチャレンジャーが年間の活動と成果を報告



新たに27人のチャレンジャーを迎えた第7期生贈呈式



修了式では、第6期生26人に修了証を贈呈



アスリート、研究者、審査委員が親交を深めた交流会



顕著な成果を残した2名に特別チャレンジャー賞が贈られた



発表の合間にはダンスで身体を動かしてリフレッシュ



浅見審査委員長による基調講演



スポーツ討論会のテーマは「練習とは何か」



「はやぶさ」のチャレンジに刺激を受けた特別講演

Ⅱ 事業別の活動報告

2. スポーツ振興支援事業

スポーツ振興支援事業は、心身ともに健全な子どもたちの育成支援を目的に、ジュニアヨットスクールの運営やセーリング競技会等を開催したほか、スポーツ機会を増やしたり自然・水辺体験を促進するなどの支援にも取り組んでいます。

(1) ジュニアヨットスクール葉山の運営

「ジュニアヨットスクール葉山」（スクール生 16 名）では、「心身ともに健全な逞しい人材の育成」「チームリーダーの育成」「グローバルな人材の育成」という指針に沿い、葉山マリーナ（神奈川県葉山町）をベースとしたセーリングスポーツ指導を行うとともに、各種の自然・水辺体験学習を積極的に展開しています。

■水辺の安全学習

7 月 22 日、スクール生とその保護者を対象に恒例の水辺体験学習「水辺の安全講習会」を実施しました。この体験型講習会は、水辺に親しみながら安全確保の知識や技術を身につける海洋教育の一環として行うもので、日本ライフセービング協会のインストラクターの指導のもと、水難事故防止を目的とした座学と実技講習を通じて「自分の命は自分で守る」知識と技術を養いました。



落水後に体温低下を防ぎながら集団で救助を待つ訓練

■セーリング練習／夏季合宿

月に 2 ～ 4 回行われるセーリング練習では、風の力でヨットを走らせるセーリングの魅力を体感しながら、操船の基本技術からレース参加に必要な応用技術まで、クラスや個々のレベルに合わせて指導を行いました。また、7 月 31 日から 8 月 4 日には静岡県浜名湖で 4 泊 5 日の合宿を行い、春から夏にかけて学んだ技術をさらに高めるとともに、共同生活の体験を通してチームワークやリーダーシップを身につけました。



レースを想定した練習で競争心と技術を磨いた

■自然・水辺体験学習／外洋帆走訓練

夏季合宿の最終日にはカヌートレーキングや川遊びを行ったほか、夏休み最後となる 8 月 24 日～ 26 日には、葉山マリーナから伊豆大島までの 26 マイル（約 48 キロ）をセーリングクルーザーで往復する外洋帆走訓練を実施しました。スクール生がリーダー、その他必要な役割分担を決め、状況に応じて判断を下しながら自然の中で集団行動を育みました。



自然との触れ合いを織り交ぜたカヌー体験



航海を通じて逞しさやチームワークを育んだ

(2) 第 21 回 YMFS セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖の開催

「第 21 回 YMFS セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖」は、小学生から高校生までのジュニア／ユース年代におけるセーリング大会として、毎年 3 月下旬に開催しています。今年度は、3 月 22 日～ 25 日の 4 日間にわたり、静岡県三ヶ日青年の家において開催し、全国 20 クラブから集まった 62 隻・78 名の選手が出場しました。

また、昨年同様に、東日本大震災の被災地からの参加として、宮城県気仙沼高等学校の選手 2 名と指導者 1 名が元気なチャレンジを見せてくれました。



全国 20 クラブから 78 選手が出場

(3) スポーツ教材の提供

心身ともに健全な子どもたちの育成支援を目的に、スポーツ機会をより増やすための施策として、全国各地の保育園・幼稚園、小・中学校、特別支援学校、スポーツ団体（総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団、各種スポーツクラブ）等を対象にスポーツ教材の提供を行っています。今年度は、合計 858 件の申請の中から抽選により、サッカーボール 5 個セット、またはタグラグビーセットを東日本大震災被災地の学校等 82 団体を含む、合計 182 団体に提供しました。



磐田市立東部小学校では、タグラグビーセットを使用してヤマハ発動機ジュビロの選手とゲームを行った

(4) 第 24 回「全国児童 水辺の風景画コンテスト」の開催

第 24 回「全国児童 水辺の風景画コンテスト」は、未来を担う子どもたちが積極的に水辺へ出かけ、発見・体験したことを、子どもらしい素直な表現で自由に描くことを通して感性が育まれ、のびのびと成長するための一助となることを願って平成元年より毎年実施しています。今年度は、「水辺の遊び・水辺体験」、「港湾・船舶・河川」、「環境・自然・生物」、「漁業・漁港・漁船」をテーマに作品を募集し、全国各地の幼稚園、保育園、小学校、絵画教室など 755 団体から合計 9,097 点の作品が寄せられました。10 月 18 日の予選会では入選作品 304 点を選考し、さらに 10 月 23 日に行われた本選会にて、文部科学大臣賞、国土交通大臣賞、環境大臣賞、農林水産大臣賞（各 1 点）を含む入賞作品（計 34 点）を決定し、11 月には受賞者が在籍する学校や幼稚園にて表彰式を行いました。



34 点の入賞作品を決定した本選会

Ⅱ 事業別の活動報告

3. スポーツ文化・啓発事業

当財団では、スポーツを通じた心豊かな社会づくりに寄与するため、スポーツ振興に大きく貢献された「縁の下の力持ち」を表彰するスポーツチャレンジ賞や、子どもたちやチャレンジャーが目標に向かって取り組むその実像を通して「挑戦すること」の尊さや大切さをより広く社会に発信する活動を行っています。

また、今年度は新たな取り組みとしてスポーツ振興にかかわる調査研究をスタートしました。

(1) 第5回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

「ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」は、当財団のスポーツ文化・啓発事業の一つとして平成 20 年度より実施している表彰制度です。この賞は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰するもので、受賞者のたゆまぬ努力と成果に敬意を表するものです。また、技術、指導、研究、普及、ジャーナリズムなどスポーツに関する幅広い分野において、高く評価されるのに相応しい功績をあげられ、かつこれまで注目を浴びることの少なかった「縁の下の力持ち」的な人物・団体にスポットライトをあてています。また、本賞では、チャレンジスピリットあふれる受賞者のプロセスやその実像を通して、挑戦（チャレンジ）することの尊さ、大切さや「努力は報われる」ことが社会に浸透していくことを願っています。

平成 24 年度（第 5 回）は、競技団体、大学、報道機関等から候補者の推薦を募り、奨励賞・功労賞合計 23 件の中から 2 回の選考委員会を経て功労賞及び奨励賞各 1 名を決定し、4 月 9 日、東京會館（東京都千代田区）にて表彰式を開催しました。



※敬称略

功労賞	樋口 豊 フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者	国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、日本フィギュアスケートの「開国」に貢献
奨励賞	江黒 直樹 ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ	楽しいリハビリスポーツ」の普及をめざした日本女子ゴールボールチーム 金メダルへの挑戦

【選考経緯】 浅見俊雄選考委員長

この賞は、縁の下や裏舞台からスポーツを支えている人を表彰するものですから、選考については毎回苦勞をします。選考委員会では、まず、功労賞 15 名、奨励賞 8 名の候補者から書類選考でそれぞれ 3 名ずつ計 6 名に絞り、その後、事務局の調査をもとに最終選考会を開いて今回のお二人を表彰させていただくこととなりました。選んだ私たちとしても、非常に素晴らしい選考ができたと感じています。功労賞の樋口さん、そして奨励賞の江黒さんのチャレンジは社会の範となるものです。こうした素晴らしい人物を表彰できたことは、私たちにとっても大きな喜びであり、また誇りでもあります。

受賞者の コメント

功労賞 樋口 豊さん



私は現役時代、なんとなくフィギュアスケートが好きになって、なんとなく全日本で優勝させていただいて、なんとなくオリンピックにまで出場させてもらいました。本当であれば「メダルを目指してがんばるぞ!」という姿勢で取り組むべきなのかもしれませんが、私はそうではありませんでした。しかし、フィギュアが好きでそれに夢中になることによって、仲よくしてくれる人たちが周りにたくさんできました。そうしたことが「縁の下の力持ち」として人々の役に立ったのなら本当にうれしく思います。私はいま、幼稚園に通う小さなお子さんから、上は 80 歳の方まで指導させていただいています。そこでフィギュアスケートに取り組む人たちには、「オリンピックに出場したい」「フィギュアを心ゆくまで生を楽しみたい」といったそれぞれの夢があります。私はコーチとして、そうした夢に近づけるように導いていくために、これからもますます精進したいと思います。

奨励賞 江黒 直樹さん



選考の理由としてご説明いただいた「縁の下の力持ち」という点については、私なりに選手を支えながらやってきたという多少の自負は抱いています。しかし、その私をさらにその下から支えてくれた人々がいたことを、まず皆さんにお話ししておきたいと思います。今回はそうした人々を代表して表彰していただいたと考えています。すでに私たちはリオ・パラリンピックでの連覇に向けて気持ちを高めています。こうして一緒に取り組んできた選手たちに囲まれながら話をさせていただいていると、昨年経験させていただいたあのすばらしい思い出が蘇ってきて、私自身、いま非常に感動しています。ゴールボールは、視覚障害者のリハビリの導入として非常に役立つスポーツです。これを機会にたくさんの人々にこのスポーツを知っていただけたら幸いです。



表彰式後に関係者が集まって語り合った交流会

(2) 調査研究

平成 24 年度より、スポーツ文化・啓発事業の新たな取り組みとして、スポーツ振興にかかわる調査研究をスタートしました。

初年度にあたる平成 24 年度は、障害者スポーツに取り組むアスリートの育成・強化の現状を把握するため、調査研究委員会（委員長：横浜国立大学 教育人間科学部 海老原修教授）として「大学における障害者スポーツの現状に関する調査研究」を実施するとともに、「海辺の自然体験学習の教育的効果」に関する共同研究（東京海洋大学 海洋科学部 千足耕一 准教授）を発表しました。

■「大学における障害者スポーツの現状に関する調査研究」

平成 23 年度に国が制定した「スポーツ基本法」及び「スポーツ基本計画」の中で、障害者スポーツに関する記述が格段に増えました。特に「スポーツ基本計画」では、障害者も含めたトップスポーツにかかわる人材養成の拠点として大学が果たす役割への期待が述べられていることから、障害者アスリートの育成・強化のスポーツ環境が大学においてどのような現状にあるのかを把握するため調査を実施しました。調査結果は 3 月 29 日発行の報告書にまとめるとともに、当財団のウェブサイトでも公開しています。



■「海辺の自然体験学習の教育的効果」に関する共同研究

当財団が運営するジュニアヨットスクール葉山の活動をベースにその教育的効果の確認と活動の振り返りの観点から、外部専門家との連携により「海辺の自然体験活動および海洋教育の教育的効果」に関し、これまでの文献をレビューするとともに、今後の研究の基礎資料とすべく総説論文としてまとめました。



(3) 各種情報発信／広報活動の展開

スポーツ振興やスポーツ文化向上による社会活性化に寄与するために、ホームページなどを通じて当財団の活動をより広く社会に発信するとともに、その充実に努めてきました。

具体的には、高い目標に向かって取り組む助成対象者のチャレンジの実像（クローズアップレポート）やスポーツチャレンジ賞受賞者の紹介、スポーツ討論会や講演会の内容紹介、ジュニアヨットスクール葉山の子どもの体験紹介、各種募集情報などを掲載しました。

また、スポーツチャレンジ助成事業におけるチャレンジャー（助成対象者）や OB・OG、審査委員、事務局を結ぶ会報誌として「Do the Challenge」（刊行物 A4・4 頁）を 5 月、8 月、11 月、2 月に定期発行し、相互の情報共有と財団活動への理解促進を図りました。



チャレンジャー会報誌「Do the Challenge」



YMFS ウェブサイト



CNS

チャレンジャーズ・ネットワーキング・システム

Ⅲ 事業推進体制

平成25年3月31日現在

※敬称略

評議員

役 職	氏 名	現 職
評議員	岡崎 助一	公益財団法人日本体育協会 専務理事 (元文部省競技スポーツ課長)
	塩谷 立	衆議院議員
	武井 一浩	弁護士
	戸田 邦司	財団法人日本海洋レジャー安全・振興協会 会長 (元運輸省海上技術安全局長)
	晝馬 明	浜松ホトニクス株式会社 代表取締役社長
	柳澤 伯夫	城西国際大学学長(元衆議院議員)
	柳 弘之	ヤマハ発動機株式会社 代表取締役社長
	清水 紀彦	ヤマハ発動機株式会社 監査役
	梶川 隆	ヤマハ発動機株式会社 顧問
	大坪 豊生	ヤマハ発動機株式会社 顧問
	西山 正樹	ヤマハ発動機株式会社 顧問 (元警察庁中部管区警察局長)

理事

役 職	氏 名	現 職
理事長	木村 隆昭	ヤマハ発動機株式会社 代表取締役 専務執行役員
常務理事	杉本 典彦	当財団 事務局長
理事	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
	伊坂 忠夫	立命館大学 スポーツ健康科学部 教授(副学部長)
	伊藤 宏	公益財団法人東京都体育協会 理事
	勝田 隆	筑波大学 客員教授(仙台大学 教授)
	定本 朋子	日本女子体育大学 大学院 研究科長 基礎体力研究所所長 教授
	佐藤 潤	財団法人日本ラグビーフットボール協会 マーケティング委員長
	田原 淳子	国士舘大学 体育学部 教授
	西田 善夫	スポーツアナリスト(元NHK解説委員)
	柳 敏晴	名桜大学人間健康学部 教授
	橋本 義明	ヤマハ発動機株式会社 取締役 上席執行役員 人事総務本部 本部長

監事

役 職	氏 名	現 職
監事	田宮 紳司	新日本有限責任監査法人 代表社員 公認会計士
	渡辺 政弥	ヤマハ発動機株式会社 統合監査部

スポーツチャレンジ助成事業 審査委員(体験助成)

役 職	氏 名	現 職
審査委員長	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
審査委員	今給黎教子	海洋スポーツインストラクター、冒険家
	西田 善夫	スポーツアナリスト(元NHK解説委員)
	村田 互	専修大学ラグビー部 監督(元ラグビー選手)
	ヨコセタラシ	スポーツキャスター(元バレーボール選手)

スポーツチャレンジ助成事業 審査委員(研究助成)

役 職	氏 名	現 職
審査委員長	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
審査委員	伊坂 忠夫	立命館大学 スポーツ健康科学部 教授(副学部長)
	衛藤 隆	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所 所長、東京大学 名誉教授
	遠藤 保子	立命館大学 産業社会学部 教授
	景山 一郎	日本大学 生産工学部 教授
	川上 泰雄	早稲田大学 スポーツ科学学術院 教授
	小西由里子	国際武道大学 体育学部 教授
	定本 朋子	日本女子体育大学大学院 研究科長 基礎体力研究所所長 教授
	篠原 菊紀	諏訪東京理科大学 共通教育センター 教授
	草加 浩平	東京大学大学院 工学系研究科 特任教授
	田原 淳子	国士舘大学 体育学部 教授
	福永 哲夫	鹿屋体育大学 学長、東京大学 名誉教授
	山本 裕二	名古屋大学 総合保健体育科学センター 教授
	綿貫 茂喜	九州大学大学院 芸術工学研究院 教授

ジュニアヨットスクール葉山 指導員

クラス	担当コーチ
ベーシック／マスター	主任コーチ：湯原 浩一 (日本体育協会公認スポーツリーダー、救急救員)
	コーチ：町田 和彦
	コーチ：竹腰 真紀子(栄養士)
	コーチ：上松 慮生 (日本体育協会公認指導員、救急救員)
	コーチ：藤野 恵梨香
エキスパート／クラブ	主任コーチ：箱守 康之 (校長、日本体育協会公認上級コーチ、日赤救急救員)
	コーチ：松本 健司 (日本体育協会公認指導員、コーチ、救急救員)
	コーチ：清水 大資 (日本体育協会公認コーチ、救急救員)
	コーチ：飛内 航太
	コーチ：千足 菜穂
	コーチ：日隈 佑治

スポーツ教材の提供 抽選者

氏 名	現 職
岡崎 助一	公益財団法人日本体育協会 専務理事 (元文部省競技スポーツ課長)

第24回「全国児童 水辺の風景画コンテスト」審査員

役 職	氏 名	現 職
審査員長	工藤 和男	一般社団法人創元会 理事長 公益社団法人日展 評議員
	小野 保	文部科学省 スポーツ・青少年局青少年課 青少年体験活動推進専門官
審査員	佐川 雅悦	国土交通省 港湾局 海洋・環境課 港湾環境政策室 課長補佐
	池田 りか	環境省 水・大気環境局 水環境課 課長補佐
	宇賀神義宣	農林水産省 水産庁 漁港漁場整備部 計画課 課長
	小川 尊一	一般社団法人創元会 常務理事・事務局長 公益社団法人日展 評議員
	服部 譲司	一般社団法人創元会 会員、公益社団法人日展 会友
	杉山 悦照	一般社団法人創元会 準会員、浜松美術協会 会員
	釣谷 康	社団法人日本舟艇工業会 専務理事
	内田 眞朗	公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 常務理事・事務局長
	柘植 則孝	一般社団法人日本マリーナ・ビーチ協会 総務部長
	岡田 正文	NPO法人ジャパングームフィッシュ協会 事務局 事業部長
	鈴木 正典	ヤマハ発動機株式会社 人事総務本部 総務部 部長
	杉本 典彦	当財団 常務理事・事務局長

調査研究委員会

役 職	氏 名	現 職
担当理事	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
委員長	海老原 修	横浜国立大学 教育人間科学部 教授
委員	齊藤 まゆみ	筑波大学 体育系 准教授
	澁谷 茂樹	公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 主任研究員
	高橋 義雄	筑波大学 体育系 准教授
	中森 邦男	公益財団法人日本障害者スポーツ協会 指導部 部長 日本パラリンピック委員会 事務局長
	藤田 紀昭	同志社大学 スポーツ健康科学部 教授

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 選考委員

役 職	氏 名	現 職
選考委員長	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
選考委員	スポーツチャレンジ助成事業 審査委員が兼務	